

歴史を語る建物たち

秋田編
(第9回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

旧角館製糸工場（仙北市）



「みちのくの小京都」と呼ばれる仙北市角館の田町武家屋敷通りの一角に、今は使われなくなった旧角館製糸工場がある。

向かいの太田家が所有する建物は、明治44年に建てられ（明治31年という説もある）、2度の移転を経て、平成10年に国の登録有形文化財に指定された。

やり手だった太田家初代

明治維新後、貿易の発達によって日本では蚕糸業が急速に発達し、生糸は最大の輸出品であった。そのため、政府は全国的に製糸工場の普及を図り、秋田県では湯沢町（現・湯沢市）と角館町（現・仙北市）がその中心を担った。

明治31年に角館製糸合資会社を設立した初代太田蔵之助は、もともとは呉服屋の本人の見習いであったが、商売の腕を認められて婿となり、後に分家した。蔵之助が製糸会社を興したのも、「生糸は必ずもうかるという先見の明があったからだと思います」と、蔵之助から数えて5代目に当たる太田ケイさんは語る。

その後、明治40年に合資会社は解散し、明治44年に

角館製糸所として再開した。旧角館製糸工場がこの時建てられたのか、明治31年の合資会社設立時に建てられ角館製糸所に引き継がれたのか、実は定かではない。ともかく、再開後は、それまで蒸気だった動力を電気にするなど工場の近代化が進んだ。しかし、蔵之助は



工場内部の様子（撮影時期不明）。働き手の多くは近所に住む女性だったという。

出典：無明舎出版『思い出のアルバム 大曲・角館・六郷』

わずか7年後の大正7年に工場を閉鎖し、地主に転じた。2代目竹松はそれを発展させ、太田家は角館有数の大地主となった。

工場閉鎖の要因は糸価格の変動や過大な運転資金などとされているが、なぜ蔵之助は早々に見切りをつけたのか。筆者が、「蔵之助氏は、経営がこれ以上悪化しないうちに工場を閉鎖し、もうけたお金で地主を始めたのではないのでしょうか？」と仮説を投げかけたところ、ケイさんと次女の雅子さんは、「商才があった蔵之助のことですから、それはあるかもしれません」と答えてくれた。

米蔵から文化財へ

製糸工場としての役目を終えてからは、建物は太田家の米蔵として使用された。また、戦後に農地改革が行われた後は、農協の倉庫となった。雅子さんは、「米袋を積んだトラックが建物の中まで入ってきました。子どもの頃は、積み上げられた米袋によじ登って遊んでいました」と、当時を振り返る。

昭和40年代、当時建物があった場所に道路拡張の計画が持ち上がった。しかし、3代目至孝の「古いものを残す」という教えに倣い、太田家では建物を90度回転して北に移すことにした。それも、解体して再建するのではなく、建物を下からジャッキで持ち上げ、木レールを敷いてそのまま移動した。おかげで、木造トラスという独特の屋根組など、貴重な構造はそのまま残った。

そうした構造は、かねてより多くの建築学者などに注目されており、ある専門家の「ここまで保存されている建物は他にないから、大切にしたい」という助言で、国の登録有形文化財指定に至った。

もともと、太田家では登録日時を知らされていなかったようで、「知らないうちに（登録有形文化財の）プレートが貼られ、テレビで放送されることになったので、ああそうですか、と言うしかありませんでした」と雅子さんは苦笑する。

台風で屋根ごと飛んだ

全国で62人、秋田県でも5人の死者を出した、平成3年の台風19号は、旧角館製糸工場の建物をも直撃した。幸い大きな損傷はなかったが、越屋根がまるごと隣家まで飛ばされた。しかし、越屋根は窓ガラスが割れただけで、形状はそのまま残った。雅子さんは、「もともと骨組みが丈夫だったことに加え、ガラスが割れたことで通気が良くなり、破損を逃れたのでしょうか」と当時を振り返る。越屋根の窓にガラスをはめ直して元の場所に戻すだけで修理は終わった。先人の高度な技術のたまものである。

建物についてのエピソードをもう一つ紹介すると、韓国の人気ドラマ「アイリス2」のロケ地候補になっ



建物の移動の様子（昭和40年代）。ジャッキで下から持ち上げ、木レールを敷いて動かした。
写真提供：太田家

たことがあるという。なるほど、建物が持つ、失礼ながら一見廃屋のような雰囲気は、敵を追い詰める主人公が登場するシーンに似合いそうだ。

結局、撮影側の都合でロケは行われず、雅子さんが「建物を全部使ってアクションシーンでも撮ってくれたら、良い宣伝になったのに」と残念がっていたのが印象的だった。いずれドラマや映画などに建物が登場することを期待しよう。

活用アイデア募集中

話は戻るが、昭和40年代に現在の場所に移転してからは、建物は農協倉庫としての役目を終え、今は一部を近隣旅館の車庫として貸し出し、残りは太田家が倉庫として使っている。ケイさんは、「古い建物なので、雪おろしのプロの方を探すのが大変ですし、建物の維持に経費もかかります。愛着がなければとうに壊していただいでしょう。しかし、3代目の「古いものを大切に」という教えを守って、これからも残していくつもりです」と、静かに力強く話してくれた。当たり前のことだが、行政、民間、個人にかかわらず、所有者に愛着がなければ歴史ある建物は残らないのだ。

さて、建物の今後だが、雅子さんは「当家の倉庫にこだわるつもりはない」と言う。そして、「たくさんの方に建物を訪れてほしいので、これまでも、レストランや喫茶店、お店、資料館など、いろいろな用途を考えたことがあります。でも、消防法など、さまざまな規制があって難しいのです。どなたか、規制に明るい方がいらっしゃったら、ぜひ有益な活用アイデアをいただきたいと思います」と、悩める胸の内を語ってくれた。

約100年前に多くの女性たちが建物の中で働いていたように、再び建物の中で人々が動き回る。そして、100年間静かだった建物から、また物音や人の声が聞こえる日が待ち遠しい。

（フィデア総合研究所主事研究員・山口泰史）